

# 哀惜の情を描く―下村観山筆《大原御幸》

同志社大学嘱託講師 村木桂子

能『大原御幸』は、一一八六年（文治二）陰暦四月、後白河法皇が大原に隠棲する建礼門院を訪ねた行幸に取材する。建礼門院は、平清盛の娘で、高倉天皇の中宮となり、安徳天皇の生母となった人物。壇ノ浦の戦いで安徳天皇を擁した平家一門とともに入水したが、源氏方に助けられて一人生き残り、その後は人里離れた大原の地で幼帝の菩提を弔う日々を過ごしていた。『平家物語』灌頂巻で詳しく語られるこの行幸の件は人口に膾炙したようで、能の詞章も概ねこれに依拠している。

この悲哀に充ちた情趣深い物語は、能の舞台で演じられるだけではない。絵画の主題としても好まれ、桃山時代以降、さまざまな作品が生み出されてきた。なかでも、一九〇八年（明治四十一）、下村観山（一八七三―一九三〇）によって、第一回国画玉成会に出品された《大原御幸》（東京国立近代美術館蔵）は、氣品に満ちた作品として注目に値する。

下村観山は、岡倉天心の薫陶を受け、横山大観、菱田春草らとともに日本美術院を創設し、明治から昭和初期に活躍した日本画家である。紀州徳川家に幸流小鼓で仕えた家柄に生まれ、幼少期から謡曲に親しんでいたせいか、東京美術学校の卒業制作には《熊野観花図》（一八九四年、明治二十七）を、第二回院展には《弱法師》（一九一五年、大正四）を出品して絶賛を博したように、能に取材した傑作を生み出している。ここでは、能に造詣が深い観山が、

能『大原御幸』の世界をどのように絵画的に表現しているかを検証することによって、能の観賞の一助としたい。

さて、《大原御幸》（別紙参照）は、縦五十二センチメートル、全長七九メートルの長大な絵巻で、本文を記した詞書はなく、独立する六枚の画を、およそ六センチメートルの間隔を開けて並べ、絵巻に仕立てたものである。観山は場面選択や構図について相当悩んだようで、出品当初は第四図、第六図、見返しが未完であり、二年後によく完成することとなった。以下、観山が、能『大原御幸』の中心的なテーマである、我が子を亡くした建礼門院の哀惜の情を表現するために、どのようなモチーフを選択したのかに注目しながら、絵巻を、第一図（別紙参照）から順にひもといていくことにする。なお、部分図は、別紙に一括して配置している。

**第一図…山里の村はずれの風景を描く。**画面中央に葉桜となった桜の木が見える。「青葉隠れの遅桜、初花よりも珍らかに」と謡われた、法皇の目を楽しませる遅桜であろう。桜の根元には卒塔婆が立てられていて、後に展開する出来事が「故人の供養」であることを暗示する。なお、画面手前には、左から右へ小川が流れている。

**第二図…山中を窺う木樵を描く。**画面左から右へ小川が流れ、下手に水車を配して、水の流れは第一図へと続く。この水の流れは天心の助言を受けたもので、第五図の庵室の裏にも寛の水を描くことによって、六つの画面が、同じ一つの場所での出来事を表している

ことを強調する。なお、小川の手前には、画面左上の山道を見上げる木樵の夫婦と子どもを描く。その視線の先には、木立の合間に、行幸に供奉する人が見える。「賤が爪木の斧の音」と謡われる、木樵の斧の音が響くだけの静寂な日常が、行幸によって破られて非日常へと変貌するさまを、木樵親子を用いて視覚的に分かり易く描写していると言えるだろう。

**第三図…後白河法皇が乗った輿が木立の中を肅肅と進む。**画面中央前景には赤松や檜(ひのき)の生い茂る夏木立を濃彩で描き、背景の翠黛(すいたい)の山―緑に霞んで見える山―を淡彩で描くことによって、初夏の明るい光が、鬱蒼とした森に射しこむ様子を表している。中央にある三本の樹木のうち、左の檜に絡みついた藤【挿図1】は、蔓を伸ばして白い花を咲かせている。白藤の奥には法皇の輿が見えることから、「青葉に見ゆる夏木立春の名残ぞ惜しまる、(中略)光の影も明らけき、玉松が枝に咲き添ふや、池の藤波夏かけてこれも御幸を待ち顔に」と謡われるように、法皇の行幸を待つモチーフとして藤が描かれていることが分かる。なお、行列の最後の武官は、後を振り返って第二図の供奉を見遣っているのだろう。

**第四図…仏花を摘みに山に入った建礼門院と大納言局を描く。**画面左の女性が建礼門院で、橘(しきみ)を入れた花籠を臂に掛け、行幸に気づいたのか、庵室のあたりを眺めている。右は大納言局で、薪や蕨(わらび)を小脇に抱え、裾をたぐり寄せながら山道を下りて行く。女院の周囲に咲き乱れている橙色の花は蓮華躑躅(れんげつつじ)【挿図2】で、幼帝の極楽往生をひたすら願う女院の心情を表現する。

**第五図…浅からぬ因縁のある後白河法皇と女院の対面を描く。**本絵巻の核となる場面である。庵室で女院と対峙する法皇の顔【挿図3】は一部隠されていて、どのような表情をしているのか汲み取りにくい。一方、一門の悲劇的な最期を語る女院も後ろ向きに描かれていて、感情を読み取ることが難しい。これは、表情や身振りを極限まで抑制することによって、鑑賞者に画中人物の心情を想像させる絵画的な工夫で、能の表現とも通じるものである。室内には柄香炉や厨子が見える。厨子【挿図4】には、柔和な笑み浮かべて楽器を奏でる雲中菩薩や蓮台を持つ観音菩薩が描かれ、金剛峯寺の《阿弥陀聖衆来迎図》を彷彿とさせる。庵の外の關伽棚(あかだな)には、摘んだばかりの橘が見え、「薨破れては霧不断の香を炷き」「一念の窓の前に、摂取の光明を期しつつ、十念の柴の枢には、聖衆の来迎を待ちつるに」と謡われる、厨子の阿弥陀仏に向かい、ひたすら幼帝の極楽往生を念じる女院の日常生活を想起させる。画面右の庵室の裏手にある藁葺きの家の前には手水鉢が置かれ、笕で水を落としている。

**第六図…法皇を見送った女院が仰ぎ見た風景か。**木の間の月が朧に見える。よく見ると梢の中には一匹の猿【挿図5】がいる。「梢の風猿の声」を踏まえているが、夕闇に響く猿の声は、古来より悲哀を表象したものであった。



挿図1 第三図部分 檜にかかる白藤  
(Photo: MOMAT / DNPartcom)



挿図2 第四図部分 建礼門院の傍らに咲く蓮華躑躅  
(Photo: MOMAT / DNPartcom)



挿図3 第五図部分 庵室で建礼門院と対面する後白河法皇 (Photo: MOMAT / DNPartcom)



挿図4 第五図部分 聖衆来迎図が描かれた厨子  
(Photo: MOMAT / DNPartcom)



挿図5 第六図部分 梢の猿  
(Photo: MOMAT / DNPartcom)



下村観山(1873~1930)筆《大原御幸》絹本彩色、一巻、縦 52.0 cm、全長 790.0 cm、1908 年、東京国立近代美術館所蔵



第二図 山中を窺う山賤の家族



第一図 山里の村はずれの風景



第四図 仏花を摘みに山に入った建礼門院と大納言局



第三図 後白河法皇が乗った輿が夏木立を進む



第六図 法皇を見送った女院が仰ぎ見た風景か



第五図 庵室で後白河法皇と対面する建礼門院